




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2864 号	氏名	桑木 光太郎
審査担当者	主査	深 水 五	
	副主査	井田 弘明	
	副主査	溝口 志志	
主論文題目： A longitudinal study of FDG-PET in Crohn disease patients receiving granulocyte/monocyte apheresis therapy (顆粒球/単球除去療法を受けたクローン病における FDG-PET の有用性についての縦断的研究)			

審査結果の要旨 (意見)

¹⁸F-fluorodeoxyglucose-positron emission tomography (FDG-PET)は、クローン病(CD)患者において、治療効果判定に有用であることを本研究で明らかにした。本研究は既存治療で寛解に至らなかった症例に対して granulocyte/monocyte apheresis therapy (GMA)を行い、半数の症例で治療効果を認めている。ステロイド療法や生物学的製剤とは異なった非薬物療法が患者にとって選択肢の一つになることは意義深い。さらに内視鏡による治療効果判定は、広義には非侵襲性であるにもかかわらず、実際は前処置などによる患者への肉体的・精神的負担が強いられる。よって、FDG-PETでのCDの病勢評価の導入は、患者のQOLを向上させることができる。今後は局所変化の改善効果を検討して頂けるとさらに素晴らしい研究に発展するものと考えられる。GMAは日本発の治療法であり、このようなエビデンスの積み重ねがCD患者の診療に貢献すると考えられ、本研究は意義のあるものと考えられた。

論文要旨

クローン病(CD)の治療効果の判定には内視鏡検査が有用である。しかし侵襲性が高く頻回の実施は困難なため、低侵襲性の検査法の開発が求められている。今回、CDに対する顆粒球/単球吸着療法(GMA)の効果判定に、¹⁸F-fluorodeoxyglucose-positron emission tomography (FDG-PET)が有用であるか否かを検討した。そこで、基準治療に不応のCD12例に、GMAを週1回計10回施行した。GMA施行前、5回目、10回目に臨床的活動度(CDAI)の評価とFDG-PETを行い、両者を比較検討した。対象は男性5例、女性7例の計12例で平均年齢35.9歳であった。平均罹病期間は78.8ヶ月で、平均CDAIは206.8であった。12例中6例(50%)でGMA終了後にCDAIの有意な改善を認めた。GMAによるCDAIの変化と、FDG取り込み値の変化には相関関係が認められた($r=0.707$, $p=0.005$)。病変部におけるFDG取り込み値は、GMA有効例では治療による有意な低下を認めたが、無効例では低下を認めなかった。FDG-PETはGMAの有効性の評価に有用な検査法となることが期待された。